

新しい学習指導要領をこう読む

— これからの国語科の役割と指導方法 —

言葉の力が改めて問われている「新しい学習指導要領」が告示されました。社会生活などに活用される言葉の力を、基幹教科である国語科で確実に育てることが盛り込まれています。これからの国語科の役割と、その指導方法について、識者の方々に提言していただきます。

鼎談

横浜国立大学教授

高木 まさき

信州大学教授

藤森 裕治

筑波大学大学院准教授

甲斐雄一郎



■ PISAが突きつけた課題

高木 いよいよ「新しい学習指導要領」の告示となりました。この十年の間に国語科教育の方向性がさまざまな場面で議論されてきたわけですが、中でもやはりPISA（※1参照）が突きつけた課題は大きかったですね。

甲斐 自分の意見を述べる問いで、白紙回答率の高さや、子どもたちの読書意欲の低さは各方面に衝撃を与えました。

藤森 日本の子どもたちは、情報の取り出しや解釈はできているのに、「あなたの考え」「あなたの批評」「あなたの評価」となると口を閉ざしてしまう。このままでは、これから国際社会で、主体的な社会人として生きていけないということへの危機的な思いが、今回の学習指導要領の背景にあったと解釈しています。

高木 今回、「情報を比較して読む」「批評する文章を書く」などのいわゆる「PISA A型読解力」を意識した内容が盛り込まれたのは、こうした状況からの流れですね。

藤森 それに、「読むこと」の言語活動例に

は、「文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。」とあります。非連続型テキスト（表、図、グラフなど視覚的に表現されているもの）も積極的に取り入れてもらいたいというのも、やはり「PISA A型読解力」との関連ですね。

高木 従来は「読むこと」というと、連続型テキスト（物語、解説など）を指すイメージが強かったと思います。でも、読む対象にはもっといろいろな種類があるわけです。図表、写真、挿絵、インターネットを通じた情報など、さまざまなテキストを効果的に組み合わせる力、また、それらを読み取り、評価する力がこれからは必要となってくるのです。

■ 伝統や文化に対する意識の強まり

藤森 「新しい学習指導要領」は、PISA A型読解力を始めとして、特に欧米圏で行っている言葉の学習指導をかなり意識していますね。例えばフランスでは、中等教育では基本的にすべての教科で言語力をつけようとしています。ボーダレス社会の中で、国際社会に通用する力をつけようとしている側面があります。ただし、国際社会に通用する言葉の力

は、欧米圏型の言語活用力を育成するだけでは十分ではありません。学習者自身が、自ら属する日本社会の伝統や文化についてしっかりとした意識をもつ必要があるわけですが、今回の学習指導要領は、この側面も強く意識したという印象を受けました。

甲斐 今回、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という項目が新設されました。「言語文化」という言葉自体は、実は昭和四十四年告示の学習指導要領の中にもあり、復活というか、継続的な課題だったとも言えます。新しい学習指導要領の中では、この言葉に「伝統的な」という限定を施しており、固定的な作品を言語文化とするという捉え方に見えますね。

高木 今回は、必ずしもそうとは言えません。近く出される『解説』を見ないとはいけません。とは言えませんが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して「指導する」とあって、一定の可能性は開かれているように思います。

甲斐 従来の固定的な枠、教材観をどこまで緩やかにできるかというのが一つの課題で



はないかと思えます。多くの人がげらげら笑ってきた落語なども言語文化の一つだと捉えると、国語の自身がずいぶん風通しの良いものになってきそうですし、幸田弘子さんの朗読（※2参照）にしても、朗読行為が自己に文化としての価値があるという捉え方ができる。今こうして鼎談をしています、鼎談を始める前と始めた後では、自分自身が少し変わったという体験をしたとします。それは鼎談という言語文化の一つの様式に参加したことと所産として理解することができます。

化に慣れ親しんでいくことに主眼を置いたため、小学校に古典的な内容が入りました。小学校では、昔の言葉を体感したり、リズムに慣れたりすることが主かと思えます。そして中学校では、今まで体感してきたことが何だったのかに気づいていく。簡単な文語のきまりや、古典にはさまざまな種類があることなどを知りながら、古典に触れ（一年）、楽しみ（二年）、親しむこと（三年）に主眼が置かれています。詳細な読解や細部にわたる文法の理解などを求めているのは従来通りです。

ろさがわかれば、原文に入っていけるかもしれない。原文中心の学習だけでなく、古典のおもしろさに触れるためのいろいろな入口があつていいと思います。

■これからの古典学習

甲斐 「伝統的な言語文化」は小学校国語の内容ともなるわけですが、そうしますと中学校の古典がどのように変わるのか、ということが新たな課題となりそうです。

藤森 小学校から中学校への展開、中学校から高等学校への展開を考えた場合、現状では中学校と高等学校の間で断絶が起きているのです。高等学校では原文を中心に学習を進めようとするため、古典のおもしろさを感じにくくしてしまう。古典を原文で読めなくても、現代の言葉で古典を学び、おもしろさを感じられるのであれば、これも立派な古典学習だと思います。

高木 文学史上の人物を覚えるなどの詳細な部分に踏み込む必要はありませんが、「松尾芭蕉は江戸時代の人で、江戸時代はこんな時代ですよ」といった基本的な押さえるは必要でしょうね。

■学習のプロセスを見直す

高木 大雑把なことでは、中学校はそれほど大きく変わることはないと思います。より長い時間をかけて日本の言語や伝統文

高木 戦後、原文主義にやや偏りすぎたように思います。正宗白鳥が、『源氏物語』のおもしろさを解つたのは英訳を読んでからだったという話もある。ストーリーのおもしろ

甲斐 目標に関わるところを、平成十年告示の学習指導要領と比べた場合、学習観に顕著な違いがあるように思います。平成十年版は、まず、個人ありきという発想に見えます。

**「これからの時代に要求されるのは、「個人ありき」ではなく、
「文脈の中で」自分自身を作っていくこと」です。**

—— 甲斐雄一郎

例えば、「自分の考えを大事にする」とか「自分のものの見方や考えを深める」という内容が筆頭にきています。ところが今回は、「目的や場面に応じる」という内容で始まっているわけです。これからの時代に要求されるのは、文脈の中で自分自身を作っていくことかと思えます。

甲斐 一九九〇年前後から自己学習力ということが盛んに言われました。自分の行為に対して自覚的になる、言い換えればメタレベルから見つめ直すことが継続的な課題として挙げられているのだと思います。

藤森 例えば、話し合い活動だったら、今の話し合いの有り様を評価しながら、ある合意形成に向かって、考え方の筋道を互いに協力しながら行っていく。こういうことが期待されているのだらうと理解しました。

高木 メタレベルから見直すというのは、例えば「読書」などのときにも取り入れてほしいと思います。文学作品しか読んでいない子が、自分の偏りに気がついてもっと違うジャンルに目を向けるとか、自分が読みたい本をノートに書き留めておくとか、友達に聞いた本のリストを書いておくとか、自分がこういう本を読んでいるなということを見出すことで、それからの人生に生きるような読書生活を考えることになるのです。

甲斐 目的を実現するためには、どのような筋道を通つたらいいのかという見通し力が必要になるわけですね。

藤森 平成十八年度版の教科書にも、「学習している自分を確認できるしかけ」があります。例えば、「話し合つて考えよう」（一年

高木 学びの過程を自分なりに振り返ることも求められているかと思えます。

すね。例えば、「話し合つて考えよう」（一年

p100）では、グループ・ディスカッションが停滞したときに、どんなふう立ち止まったり振り返ったりするとよいかヒントが提示されています。引き続き、取り入れていってほしいと思います。



甲斐 雄一郎（かい ゆういちろう）

1957年兵庫県生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授。専門は、国語教育史。編著に『国語科教育学研究の成果と展望』（明治図書）、『国語科の成立』（東洋館出版社、近刊）などがある。



■新しい文学教育の可能性

藤森 第二学年の、「書くこと」の言語活動例に、「表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること。」という情緒的な表現活動が示唆されています。これと相並んで、「多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと。」とあります。情緒面も論理面も、互いに補い合うかたちで育ててもらいたいということなのかと深読みしているところです。

高木 「詩歌を作ること」と「論理的な文章」は、違うといえば違うのですが、いわゆる芸術的な文章でも論理は必要かと思えます。あるものに注目するものの方とか、こういう表現を使ってみよとか考えることは、論理的な思考力なのです。例えば、『走れメロス』の場合、「メロス」ではなくて、「王様」の立場から物語を書いてみよとすることは知的な発想の転換と言えます。

甲斐 確かにそうですね。以前聞いた海外の高等学校の例では、『マクベス』の終末部分はあのようなことでもいいのかどうかをディスカッションする学習がありました。ある物

語について自分自身の判断を下すためには、創作体験というのが素人なりにもあったほうが、はるかに豊かなディスカッションになるだろうと考えます。これはまさしく、新しい文学教育の一つの可能性を切り開く内容ではないかと捉えることができます。

高木 現場では、授業時数が足りないという声をよく聞きます。足りないのは事実だと思いますが、例えば、文学の指導はこれだけよかったのかと自問し、再構築してみる部分があつていいと思います。今まで取り組んできたことを短時間でやろうとしても行き詰まるだけなのです。「この教材ではこれだけを押しさえよう。」といった発想の転換が必要なんです。

藤森 冒頭の「PISA型読解力」も、従来の読解とは発想の違うものですね。

高木 そうですね。さらに関連して言えることは、『大体』でもいい学び」があるということです。例えば、新聞記者同士でも、経済面を政治部の記者が批評できるかということ、なかなかできない。読書も同じです。きちんと理解するということは大変なことなのです。物事を大づかみにして捉えていく力は

き方を習ったとしても、形式のもつ意味を考えることが大切です。序論はなぜ必要なのか、キーワードがなぜこの位置にあるのか、といったことを考えさせる。文書構成がなぜこういう形ででき上がっているのかというような本質的な原理を考えさせることが大切なのです。

藤森 語彙の学習でも同じことが言えるかと思えます。理科的な語彙や社会的な語彙がたくさんあつたときに、それらの並び方とか、上位語・下位語の関係の付け方とか、つまり、いかにすればそれらを整頓できるかという学習は、国語科の役割になるのかと思えます。

甲斐 他教科から国語科への還元とか、日常生活から国語科への還元という逆ベクトルをもっといきいきと考えていく必要があると思います。そう考えてみると、時間数が思いのほか増えなかつた国語科ではありますが、

「全体を俯瞰する力」と「筋道を立てて論証する力」、
「のじり合い合った」といふに、
「本当に力が生まれるんです。」

藤森裕治



藤森 裕治 (ふじもり ゆうじ)

1960年長野県生まれ。信州大学教育学部教授。専門は、授業コミュニケーション論、民俗学。著書に、『対話的コミュニケーションの指導』(明治図書)、『死と豊穡の民俗文化』(吉川弘文館)、『パタフライ・マップ法』(東洋館出版社)などがある。

当然必要です。今回の学力調査を見ても細かいところを読み取るよりも、大づかみにする力が求められています。それにどこかで見たり聞いたりして、詳しくは分からないけど「大体」なら分かるという言葉や知識が多いほど、読解力も読書力も伸びるのは間違いないでしょう。

藤森 全体を俯瞰して、直感的にそれを見出していく「大体」な力、これを「勘」という言い方をしたとします。それが一つの大きな要素だとすると、もう一つは、それを筋道を立ててきちんと論証したり、咀嚼したり、評価したりということが大切です。この二つが絡まり合いながら、その混ざり合ったところに、本当の力が生まれるのではないのでしょうか。

■国語科における「言語活動」とは何なのか

藤森 今回の学習指導要領では、すべての教科で言語力の育成が唱えられています。国語科はその中核を担っているわけですが、他の教科との協力的体制で言語力を育成できるわけですね。

豊かさを回復できる一つの方法になるかと思えます。

高木 国語科としての言語活動重視ということは、どういうことなのかを議論し、問題を深めていってほしいですね。



■国語の時間の本当の価値

甲斐 河合隼雄氏(※3参照)が言うには、人間は十二歳前後で一旦自己完成するものの、思春期にはそれが崩壊して、そのあとまた自己を再構築して大人になっていくのだそうです。だから中学生というのは、「人生はこんなものなのか、いや、こんなはずではなかった」という思いを繰り返す時期なのです。

先ほど、今回の学習指導要領の一つのポイントが、「個人ありき」というよりは「文脈ありき」ということを申し上げました。このように戸惑っている中学生に、友達と共にある意味を、学習を通して体験してもらおうことに、国語の時間の本当の価値があるのではないのでしょうか。今回の学習指導要領は、それを強調しているように思うのです。

藤森 日常生活、社会生活の中で、子どもたちにとって圧倒的な時間を占めるのは学校生活です。つまり、基幹教科である国語は、

日常生活や社会生活の中で、言葉はどんな働きをいつするの、いつするな角度から考えようと思えます。

—— 高木まさき

子どもたちの大部分の時間の根幹を担っているわけです。それをむしろ前向きに捉えていただきたいですね。国語の時間に培った力が、日常生活、社会生活のさまざまな場面で花開くのです。

甲斐 今回の学習指導要領では、日常生活と社会生活とが前面に出てきましたが、これらをフィールドにした以上、これまでとは異なる教材研究のあり方が探求されなければいけないですね。

高木 日常生活・社会生活と国語との関連については、再構築して捉え直してほしいと思います。わたしたちの日常の言語行為を振り返って見れば、何かに触れたとき、自然と一言発したくなります。例えば映画を見れば、「楽しかったね。」「つまらなかつたね。」と。

批評的なこと、評価的なことは、実は普段の生活ではやっているのに、学習の場からは追いつき、特殊なことにしてきてしまった。そ

れらを、国語教育の中で、もう少し普通の言語行為のプロセスとして素直に位置づけたいでしょうか。日常生活や社会生活の中で、言語活動はどんなふうに行われているのか、いろいろな角度から考えていってほしいと思います。



高木 まさき (たかぎ まさき)

1958年静岡県生まれ。横浜国立大学教育人間科学部教授。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員。著書に、『「他者」を発見する国語の授業』(大修館書店)、『「本の世界」を広げよう』(共編著・東洋館出版社)などがある。

甲斐 そして、なぜそのような学習が意味を持つのかということを考えてみるのが、国語科におけるかけがえのない学習経験になるのかと思います。

高木 今回の鼎談がその足掛かりになれば幸いですね。戦後の国語科教育は狭い教室に閉じこめられた学習からの開放として出発しましたが、気がついたら、また教室という特殊な空間に閉じこもってしまった。そこで、言語環境、社会環境も激変する中において、日常生活や社会生活という観点から国語教育を逆照射してみたら、「よりよく楽しく生き甲斐をもつていきるためには、こんな力が必要ではないか。」そんな問いかけが、今回の学習指導要領の底にはあるように感じます。

※1 PISA

Programme for International Student Assessment (学習到達度調査) の略称。OECD (経済協力開発機構) が二〇〇年から三年ごとに行っている、義務教育終了段階の十五歳の生徒を対象にした学習到達度調査。読解力・数学的リテラシー(「知識・能力」・科学的リテラシーの三分野について調査する。日本のスコア、順位は、回を追うごとに低下の傾向にある。読解力を重点的に調査した二〇〇〇年の「生徒質問紙」によると、「毎日趣味として読書をしているか」という質問に対し、日本は55%の生徒が「趣味で読書をした」と回答しており、OECD平均の32%よりも多く、参加国の中で最も高い割合であった。また、記述や論述の問題で、他国よりも白紙回答率が高いという調査結果も出た。

※2 幸田弘子さんの朗読

女優・幸田弘子さんが舞台の上で樋口一葉作品などの日本文学を朗読することで知られている。

※3 河合隼雄氏

一九二八―二〇〇七年。臨床心理学者、京都大学名誉教授、元文化庁長官。日本人で初めてユング派分析家の資格を取得し、日本にユング派心理療法を紹介した。教育改革国民会議委員、文部科学省顧問を務めるなど、日本の教育にも幅広く貢献した。

